

# 広島図書と教育雑誌「ぎんのすず」をめぐる人々

三 浦 精 子

## 一 広島児童文化振興会と教育雑誌「ぎんのすず」の変遷

太平洋戦争末期、世界ではじめて原子爆弾が投下された広島市は、すべてのものが灰燼に帰して終戦を迎えた。その翌年一九四六年六月、戦後の復興に立ち上がった広島市内の小学校教師たち六十余名によって一つの会が結成された。へ原子砂漠のただ中で、途方に迷う児童たちに、希望を甦らせ、将来のための文化の素地を育みたい<sup>1)</sup>という願いからである。会の名前は広島児童文化振興会<sup>2)</sup>といった。当時千田国民学校校長の伊達高道が会長を務めた(以下敬称略)。会には、文芸・科学・美術・音楽・演劇・編集などの各部が設けられて、市内各小学校の主として五、六年生を対象に、日曜ごとに文芸教室や科学教室、美術教室、音楽教室、演劇教室などが開かれていた。この中の編集部が、会の機関誌を発行しようと企画したのが、「ぎんのすず」<sup>3)</sup>だった。

創刊号は、下村越夫、宮原健治、若元昭二他を中心に立案編集され、小川利雄を編集長に迎え、タプロイド判二頁、印刷・高田郡向原町勝負印刷所、一九四六年八月六日発行、十五日発売、低学年用「ぎんのすず」、高学年用「銀の鈴」のタイトルで発行された。このタイトルは公募で決められた<sup>3)</sup>。

当時の日本は敗戦直後で、連合国軍最高司令官総司令部(GHQ/SCAP)の占領下であり、出版物等はすべてGHQ・CCD<sup>4)</sup>民間検閲局の検閲を受けなければならなかった。「銀の鈴」創刊号も、文中「呪うべき原子爆弾」という表現がチェックされて、「呪うべき」の文言には削除命令が出たので、墨を塗って子供たちに配布された<sup>4)</sup>。

第二号は、雑誌の形態で発刊したいと、経費の工面をしていたところへ、当時「歌の新聞」(創刊一九四六年八月一日、総彩色、十八頁)を発行していた広島印刷株式会社から発行の申し入れを受ける。

この会社は、松井富一を筆頭に、大澄君人、津川正美など印刷専門スタッフがそろっており、旧海軍の委託工場ではあったが、よい技術と機械、それに英軍指定工場で、たぐさんの用紙を持っていた。申し入れは即決された。<sup>(5)</sup>

第二号は、一九四六年十月、一・二年用「ギンノスズ」、三・四年用「ぎんのすず」、五・六年用「銀の鈴」各十月号（各十八頁）が刊行された。編集発行者は広島児童文化振興会、発行は広島印刷株式会社出版部であった。

学校を通して予約販売する直売方式（書店では取り扱わない）で販売したため、返本も少なく、宣伝も功を奏して、発行部数は順調に伸びていった。しかし、教師の仕事と平行して月刊誌三種を編集発行していくことは至難の業で、広島児童文化振興会名での編集は、一九四七年（昭和二十二年）二・三月合併号をもって終わっている。

その後の「ぎんのすず」は、松井富一、大澄君人、津川正美たちによって編集刊行されていくが、一九五三年六・七月合併号を最後に広島からの発行は消える。一九四九年六月ごろの最盛期には、「ぎんのすず」刊行百二十万部に達し、他誌発行物を合わせて二百万部を数えるほどになる。<sup>(6)</sup>が、一九五〇年に入って経営が悪化し、発行部数も下降し始め、休刊と再刊を繰り返しながら終焉に向かう。

「ぎんのすず」は、その後、戦後児童文学史上でも話題にされることもなく、資料も散逸してしまったこともあって、研究対象にもな

らず、その実体は不明のままだったが、一九九九年十月、広島図書館の元会長故松井富一夫人早苗氏から、八百点にのぼる資料が広島市立中央図書館に寄贈されて、これを契機にぎんのすず研究会が発足（二〇〇〇年四月三十日）し、広島図書や「ぎんのすず」をめぐる内容が少しずつ解明され始めた。研究会は毎月、広島市立中央図書館で第四日曜に開かれている。研究誌「すずのひびき」創刊号が二〇〇二年三月に刊行された。

## 二 広島図書株式会社の文化活動と発行物

一九四七年四月以降、広島児童文化振興会から「ぎんのすず」の編集・発行を引き継いだ広島印刷株式会社出版部（以下広島印刷）は、直販方式もそのまま受け継ぎ、販売部数も順調に伸び、一九四七年五月には社名を広島図書株式会社（以下広島図書）として創立する。中学生用「科学新聞」、中学生用「銀鈴」も一九四七年四月と九月に発行された。以後の広島児童文化振興会と「ぎんのすず」の関わりは、学習頁の指導面で一部の教師たちと個人的な関係になっていく。広島児童文化振興会の活動自体も、一九四八年五月に広島児童文化会館を設立させたのを頂点に、それぞれの学校整備や職場の教育活動が多忙になって、会自体の活動は急速に衰えていった。<sup>(7)</sup>

会社としての独自の児童文化活動は、第一回銀の鈴子供祭（一九

四十六年十月二十七日、広島市旭座Ⅱ参加者四千八百名)を皮切りに、第二回一九四七年二月二十四日、広島市松竹座で参加者二千百名、以後名古屋市東山公園(同年六月八日・参加者一万六千五百名)、福岡市大博劇場(同年七月十五日・参加者三千二百五十名)、岐阜県東濃地方で(同年八月十八日、参加者三千名)、高知市朝日劇場では同年十月十五日、参加者四千五百名、同年九月二十一日には広島県宮島町紅葉谷公園で参加者六千八百名で開かれた。同年十一月三日は京都市円山公園で参加者一万三千名を集め、岐阜県多治見市公民館では九百五十名を迎え(同年十二月十五日)、一九四八年に入ってから、三月八日、広島市第一高等女学校で参加者千百名、四月十八日には尾道市千光寺公園で参加者三千五百名で開かれている。平行して、フレール精神の徹底をはかる幼児教育のために、保母講習会も各地で開かれた。<sup>(9)</sup>一九四九年二月二十二日、三千名を集めて福岡市で開かれたのが子供祭の記録の最後だが、同年九月からは作曲家高木東六、ソプラノ歌手大谷冽子、テノール歌手升田徳一のコンビによる「青空コンサート」が全国的に展開される。同年十一月には、銀の鈴文化賞の募集も始まっており、経営が悪化したといわれる一九五〇年以降も、大型バスを改造した移動図書館を走らせたり、同年三月に兵庫県西宮市で開かれた「アメリカ博」に児童図書館を出展した。この設備はやがて広島県に寄贈され、広島県立図書館創設の契機になった。五十年十月には東京日比谷公会堂で「ぎんのす

ず」こども音楽会全国大会」が開かれ、「ぎんのすず」を宣伝する相乗効果をねらった企画とはいえ、多くの費用と労力を注ぎ込んだの文化事業は、子供たちへ希望を与え、子供の未来を願う熱意がなかったら、決して成功しなかっただろう。

広島図書の出版物は、これまで次のものが確認されている。(広島印刷出版部のものもふくむ。出版年月日、書名、所蔵確認図書館・所在地の順)

一九四六年八月一日「歌の新聞」創刊号、二号(九月刊)三号(十月刊)発行歌の新聞社(広島印刷と同住所) 広島市立中央図書館所蔵

一九四七年八月六日「ぎんのすず」低学年、「銀の鈴」高学年、創刊号。タプロイド判、広島市立中央図書館所蔵

一九四七年十月一日「ギンノスズ」一・二年十月号。「ぎんのすず」三・四年十月号。「銀の鈴」五・六年十月号。広島市立中央図書館所蔵

一九四八年四月一日「ぎんのすず」一年四月号。「ぎんのすず」二年四月号。「ぎんのすず」三年四月号。「銀の鈴」四年四月号。「銀の鈴」五年四月号。「銀の鈴」六年四月号。広島市立中央図書館所蔵  
一九四七年四月一日「科学新聞」創刊号、十月号。メリーランド大  
学図書館ブラング文庫(以下ブラング文庫)所蔵、アメリカ  
一九四七年九月一日「銀鈴」中学生創刊号(九月号)と十月号、十

- 一月号、十二月号。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四八年一月一日「銀鈴」一月号、二月号、三月号。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四七年十一月一日「新科学」創刊号（十一月号）～十二月号。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四八年一月一日「新科学」一月号～七月号、九月号。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四七年十二月一日平井房人漫画「どんぐり太郎」プランゲ文庫所蔵
- 一九四八年四月一日「銀の鈴文庫」全百冊、逐次刊行物。現在出版確認されているのは四種二十回配本までの八十冊。広島市立中央図書館所蔵七十七冊、国立国会図書館八十冊所蔵、東京
- 一九四八年四月一日幼稚園の教育絵本「プレイメート」創刊号。プランゲ文庫所蔵、他個人所蔵、大阪市
- 一九四九年二月一日幼稚園の教育絵本「プレイメート」二月号。個人所蔵、広島市
- 一九五〇年十月一日幼児雑誌「プレイメート」十月号、十一月号、十二月号。広島市立中央図書館所蔵
- 一九五一年一月一日幼児雑誌「プレイメート」一月号、二月号、三月号、四月号、五月号、七月号、広島市立中央図書館所蔵
- 一九四八年四月一日「Teen Age Girls 青空」(以下「青空」)創刊号<sup>(10)</sup>
- (記録のみ、本体未確認)
- 一九四八年五月一日「青空」五月号(飛翔号)、六月号、七月号、九月号、十月号、十一月号、十二月号。国立国会図書館所蔵、東京
- 一九四九年三月一日「青空」三月号。国立国会図書館所蔵、東京
- 一九四九年五月一日「青空」六月号、七月号、九月号、十月号、十一月号。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四八年四月一日「理科の友」広島市立中央図書館所蔵
- 一九四八年十二月一日「こどものうた」広島市立中央図書館所蔵
- 一九四八年十二月一日「えどくほん」一・二ねんせい、三・四年生。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四八年十二月一日「学級文庫」三・四年生。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四八年十二月一日「新社会」創刊号。国立国会図書館所蔵、東京
- 一九四九年一月十日ポーリン・ヤイデイ「民主主義教育の理論と実践」広島市立中央図書館所蔵
- 一九四九年二月一日沢井一三郎漫画「カンちゃん虫の国ぼうけん」プランゲ文庫所蔵
- 一九四九年四月一日「GINNOSUZU 理科と社会科」中学一年創刊号(四月号)～十二月号。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四九年四月一日「GINNOSUZU 理科と社会科」中学二年創刊号

- (四月号) 十一月号。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四九年四月一日 B・M・パーカー「おもちゃあそび」基礎科学教育叢書日本版、原書ロー・ピーターソン会社、広島図書、三村剛昂・増本文吉・岸谷貞次郎監修。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四九年六月一日松井富一「国際的出版都市建設の夢」広島市立中央図書館所蔵
- 一九四九年六月 英語版グラフ誌「HIROSHIMA」個人所蔵、京都市他
- 一九四九年七月一日「よいこのかがく」一年。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四九年八月一日「岩に刻んだ地球の歴史」基礎科学教育叢書日本版、前掲同。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四九年十一月一日モード&ミシユカ・ピーターシャム作絵「社会科お話の本」全十八冊。広島市立中央図書館所蔵
- 一九四九年十一月一日エフ・エン・カーリング「民主主義の技術」議事進行の手引き・日本の団体のために」広島市立中央図書館所蔵
- 一九四九年十二月一日稲富栄次郎「世紀の閃光」広島市立中央図書館所蔵
- 一九四九年十二月一日「たのしいふゆ」基礎科学教育叢書日本版、前掲同。広島市立中央図書館所蔵
- 一九五〇年一月一日「銀の鈴中学生」創刊号、二号。国立国会図書館所蔵、東京
- 一九五〇年一月一日「動物の旅」基礎科学教育叢書日本版、前掲同。広島市立中央図書館所蔵
- 一九五〇年三月一日倉金章介漫画「おさる三銃士」広島市まんが図書館所蔵
- 一九五〇年四月一日長尾正憲「銀の鈴は子供たちに何を教えようとするか」広島市立中央図書館所蔵
- 一九五〇年四月一日「おにわにくるとり」「たのしいはる」「たのしいなつ」「たのしいあき」基礎科学教育叢書日本版、前掲同。広島市立中央図書館所蔵
- 一九五〇年五月一日「六つあしのなかま」基礎科学教育叢書日本版、前掲同。広島市立中央図書館所蔵
- 一九五〇年五月一日「第一回全国児童作品選集」(一九五〇年版)広島市立中央図書館所蔵
- 一九五〇年六月田坂具隆監督、ぎんのすず映画協会編、映画フィルムとシナリオ「ぼくらのゆめ」広島市立中央図書館所蔵
- 一九五〇年八月一日「きのは」基礎科学教育叢書日本版、前掲同。広島市立中央図書館所蔵
- 一九五〇年九月幼児用「ぎんのすず」第一集。広島市立中央図書館所蔵

一九五〇年十一月幼児用「ぎんのすず」第二集。広島市立中央図書館所蔵

一九五一年七月一日「第二回全国児童作品選集」(一九五一年版)広島市立中央図書館所蔵

一九五二年二月十日英語版「SILVER BELLS」第一巻第一号(創刊号)個人所蔵、広島市

一九五二年六月一日英語版「SILVER BELLS」第一巻第五号、浜田広介記念館所蔵、山形県

一九五二年九月一日英語版「SILVER BELLS」第一巻第八号、個人所蔵、広島市

一九五三年一月一日英語版「SILVER BELLS」第二巻第一号、個人所蔵、十一冊のうち一月号、二月号、三月号、七月号、九月号、十二月号、確認。シカゴ大学、アメリカ

一九五二年九月一日「幼稚園ぎんのすず」創刊号、広島市立中央図書館蔵

一九五二年十月一日「よいこの社会科」旬刊、広島市立中央図書館蔵

一九五〇年〜一九五二年「一年のおんがく」〜「六年の音楽」広島市立中央図書館所蔵

一九五二年「新修よいこのさんすう」一年〜六年、広島市立中央図書館所蔵

一九五二年「改訂版 一年のおんがく」一年〜六年、広島市立中央図書館所蔵

一九五二年「よいこのこくご」二年上下、五年上下、六年上下、広島市立中央図書館所蔵

広島市立中央図書館が所蔵する「ぎんのすず」は、右記の他に約四百冊を所蔵している。広島図書発行の教科書は、学年別に五十種類以上発行されたことが確認されているが、全冊所蔵者は未確認。確認された記録は、先行資料森本和子著「占領下の翻訳絵本と教育」に詳細に述べられている<sup>(1)</sup>。

広島市立中央図書館には「ぎんのすず」の他に、付録の「こんぱにおん」「コンパニオン」や別冊「セミマンズリー」「学習の友」など百七十六冊を所蔵している。

基礎科学教育叢書は広島市立中央図書館所蔵の他に「光のはなし」「火のはなし」「月の世界」「寄生植物」「雲と雨と雪」「音のはなし」「自然界のつりあい」「物はなにからできているか」「太陽のやくめ」「やくにたつしよくぶつとどうぶつ」「植物の一年」「かくれんぼする水」「あつまって生活する動物」「はのいろいろ」の十四冊が広島図書から刊行されていることが森本和子の研究で判明している<sup>(2)</sup>。

三「ぎんのすず」発行者 松井富一について

広島児童文化振興会から引き継いで、その販売網を全国に広げた広島図書の経営者松井富一（まつい・とみかず、以下敬称略）とはどんな人だったのか。

松井富一は、一九〇八年（明治四十一年）十二月十八日、大阪府南河内郡古市（現羽曳野市誉田）に四人兄弟の長男として生まれた。学校を卒えると大阪市の印刷所に就職し、印刷技術の腕を磨き、広島市へ二十三歳の時に移ってくる。印刷所に就職し三年で独立、原色印刷会社を設立して代表となるが、戦争の激化とともに同業統制され、一九四三年九月、二十四社が合併して広島印刷株式会社を設立し、代表となる。住居は広島市幟町にあった。<sup>(13)</sup>

一九四五年八月六日、工場に出勤途上の舟入本町で被爆し、以前に事故で負傷していた右腕にさらにダメージを受ける。自宅では妻早苗も被爆した。八月十五日終戦。工場も被害を受けるが、疎開させていた機械などを調達して十月上旬には南観音町六一四番地で印刷業務を再開する。灰燼に帰した校舎の焼跡で、子供がみかん箱に腰をかけて無心に本を読んでいる姿に心打たれ、子供のための出版物を発行しようと決意する。<sup>(14)</sup>

一九四六年五月、かねてから畏敬していた日本画家で鳥瞰図絵師の吉田初三郎を招聘して原爆図の制作を依頼する。<sup>(15)</sup> 八月には「歌の

新聞」を創刊し、三号まで発行するが売れ行き不良、前途多難だったところへ「ぎんのすず」発行の話があり、起死回生の思いで発行を申し入れ成功を収める。<sup>(16)</sup> 「ぎんのすず」発行と平行して「銀の鈴・子供祭」も各地で開き、「ぎんのすず」の名を広めた。朝日新聞にも一九四七年二月までの間に四回の新聞広告を載せ、子供祭はこの時期十二回の開催で延べ五万五千七百人の参加を得た。

「ぎんのすず」の雑誌形態も低・中・高学年の三種類から、学年別になったのは一九四八年四月からである。このころ松井富一は、前年五月に資本金十八万五千円の広島図書株式会社を設立し、十一月には広島市商工会議所副会頭になる。十二月にはさらに資本金五百万円を増資している。<sup>(18)</sup> また、出版物も新刊雑誌の創刊で読者を増やしていった。広島印刷は、操業開始早々に英国軍の指定工場となり、配給制度だった紙も優先して保有できた。通訳として入社した坂出姉弟（フロレンス坂出・坂出倫吉⇨カナダ日系二世）によって、米国の児童出版物の翻訳をはじめ、米国の児童たちとの交流や日本の漫画や童話を英語化して海外に紹介することを可能にした。それはまた、占領下のGHQとの関係にも影響を与えた。検閲が厳しかった中で国外向けの英語版グラフィ誌「H I R O S H I M A」が発行され（一九四九年）、その中には吉田初三郎の広島原爆図や戦前の広島図、松井富一の被爆体験記の他、長尾正憲の「今日の広島」が加藤悦二の写真で被災状況や被爆状況が詳しく書かれている。当時米軍

に没収され後に返還された被爆者の身体被害写真や、原爆による広島市内類焼図、被爆距離と生存率のグラフなど、原爆に関する科学的分析図も掲載され、「広島語りべ」として楠瀬広島県知事夫人、伊藤豊広島商工会議所会頭、長田新広島文理科大学学長、浜井広島市長、花柳寿鶴各氏の被爆証言も収められている。国内向け出版物なら当然検閲でチェックされ、出版停止にもなりかねない記録が、発行許可されていることは、特別な計らいがあったからだろう。巻末にはアドバイザーとして、当時の総司令部の幹部四名の名前と顔写真が載っている。広島図書と当時のGHQやCIEとの親密な関係がわかる貴重な資料である。

広島図書との取引銀行だった芸備銀行が広島銀行と改称され、経営陣が刷新されると、広島図書への融資は悪化し、一時は経営に銀行が介入してくるが、一九五〇年末には融資が緩和され、松井富一は翌年一月十四日、フロレンス坂出渉外部長を通訳として渡米する。基礎科学教育叢書翻訳の版權を契約していたロー・ピーターソン会社のジョーンズ社長の歓迎を受け、ホノルル、サンフランシスコ、シカゴ、ニューヨーク、ワシントン、ボストン等を視察して回る。<sup>(20)</sup> 渡米に先駆けて、一九五〇年一月九日号、週刊誌「タイム」には松井富一は「広島島の奇跡」として紹介された。

帰国後「ぎんのすず」は再刊されるが、経営は最盛期のように回復せず、一九五三年六・七月合併号を最後に大阪書籍へ教科書版

権を譲り、松井は広島を去る。<sup>(21)</sup>

一九五二年末以降の「ぎんのすず」の発行は、松井富一は顧問となって発行者を交替するが、最終刊に向かう一九五三年は松井富一の名で発行された。発行所も広島図書から株式会社ぎんのすずに替わり、印刷は広島市南観音町六一三番地と変わらないが、発行所在地は広島市基町一二番地の商工ビルになる。最終合併号のみ発行者を変えて「広島図書」発行にもどしている。経営苦況の中でもなお、英語版「SILVER BELLS」が創刊され、その販路もアメリカを始め、カナダ、イギリス、香港、フィリピンなどへ広がる。一九五二年から一九五三年半ばまでの表紙には「FROM HIROSHIMA」のタイトルを入れるなど広島からの発信にこだわった。広島を去った後の松井富一は、「銀の鈴」東京総局を拠点に児童書の出版を継続した後、大阪に戻り、幼児絵本「プレイメイト」を月刊幼児絵本「ぎんのすず」として一九九五年三月まで発行し続けた。帰阪当時、松井は関西テレビで幼児番組を企画するなどしたが、一九七〇年(昭和四十五年)十二月二十七日、大阪赤十字病院で死去する。故郷の生地、大阪府羽曳野市誉田には、松井富一の偉業を讃える頌徳碑が建っている。<sup>(22)</sup>

#### 四 「ぎんのすず」とその系列雑誌の執筆者たち

「ぎんのすず」は一部学年単位で欠落している部分はあるものの、

研究対象として大勢は見通すことができる。広島市立中央図書館所蔵、国立国会図書館所蔵で補い合う部分もあり、以後も「ぎんのすず」所蔵者について確認は必要である。現在確認が可能な範囲での執筆者（作家、詩人、児童文学作家、随筆家、研究者、挿絵画家、漫画家）について概略を挙げてみる。「ぎんのすず」の他に、「銀鈴」「青空」「新科学」「理科と社会科」中学一年、中学二年への執筆者もふくまれている。（五十音順）

(一) 一般文学作家・評論家

青柳瑞穂、阿部知二、一ノ瀬幸三、乾信一郎、井上究一郎、伊馬春部、大木雄二、大宅壮一、尾崎一雄、尾崎士郎、神谷弘、香山滋、黒田三郎、坂西志保、寒川光太郎、城昌幸、庄野英二、芹沢光治良、壺井栄、鶴見祐輔、永井隆、野尻抱影、畑耕一、春山行夫、火野葦平、広津和郎、福田清人、北条誠、細田民樹、村岡花子、森田草平、横山百合子、若杉慧、他。

(二) 児童文学作家

池田宣政、氏原大作、海野十三、絵馬三平、大林清、岡本良雄、片山昌造、河合三郎、川崎大治、神戸淳吉、楠山正雄、久保喬、久米元一、久留島武彦、佐伯千秋、酒井朝彦、佐々木邦、佐藤さとる、佐藤義美、沢田謙、柴野民三、白木茂、土家由岐雄、筒井敬介、都留美正夫、徳永寿美子、長崎源之助、那須辰造、奈街三郎、西山敏夫、二反長半、浜田広介、平塚武二、牧野吉晴、楨本楠郎、三木澄

子、水上明、水谷まさる、宮崎博史、宮原無花樹、宮脇紀雄、山主敏子、山本和夫、横山美智子、吉田甲子太郎、吉田絃二郎、渡辺哲夫、他。

(三) 詩人

江間章子、大江満雄、大木惇夫、大木実、勝承夫、北川冬彦、草野心平、葛原しげる、西条八十、サトウハチロー、神保光太郎、竹内てるよ、深尾須磨子、水谷まさる、百田宗治、八十島稔、山隅衛、山本康夫、与田準一、他。

(四) 研究者（翻訳家・作曲家・書家を含む）

(1) 広島文理科大学、広島高等師範学校、広島大学（付属小中学校も含む）関係者

磯部唯之、伊藤忠好、稲富栄次郎、井上桂園、伊原武、今西光美、石富広江、魚澄惣五郎、大西久一、小川利雄、小川芳男、岡崎義男、岡部充男、岡本明、奥村智徳、長田新、加藤誠一、加賀信、金子金治郎、岸秀明、岸谷貞次郎、北浦久雄、木村茂、栗本義彦、河野通匡、河内山忠雄、後藤拓男、斎藤清、斯波六郎、鈴木良徳、高木たかし、田中正範、築山重治、永井新、中田立夫、西野みよし、原田直茂、平尾大、藤原与一、東あきお、増本文吉、水木俊之、宮西通可、村井義雄、村上忠敬、室田法雄、森戸辰男、山崎喜重郎、山下敏夫、脇辰徳、脇田清、渡辺弥蔵、他。

(2) 東京高等師範学校、東京高等女子師範学校、奈良女子高等師

範学校、その他の大学関係者

阿妻知幸、阿部広司、石田佐久馬、岡本清一、小川正太郎、加藤康順、古賀哲夫、駒井卓、近藤釧三、篠原重利、砂村秀治、田中豊太郎、八代庚、八波則吉、山田外夫、山本松七、他。

(3) その他の研究者(市内小中学校の教師を含む)

青木貞治、浅藤四郎、石田正巳、石山忠造、織田幹雄、加藤須美枝、加藤正太郎、蒲生信夫、河崎英三、木村進、橋高つねお、桑原哲郎、児玉義孝、小塚芳夫、小林元、佐伯功介、坂本英治、坂本良隆、佐藤徳則、下土井豊、下村赳夫、鈴木正道、鈴木行男、関本正治、高井正文、高木東六、田口武二郎、田中稔、伊達高道、竹本三郎、田辺正、田辺赳夫、長野幸雄、中村益次郎、西村清槌、灰谷富士人、原田三夫、樋口賢、平賀志学、福富芳男、藤田稔、升田徳一、松野輝彦、三浦鏡、峰つよし、山田健一、山田要、吉岡隆徳、他。

(五) 挿絵画家、漫画家

秋玲二、天木茂晴、新井五郎、飯塚玲児、井江春代、生沢朗、井口文秀、石井達治、石田英助、伊勢良夫、伊藤幾久造、伊藤隆夫、茨木啓一、入江しげる、いわさきちひろ、岩崎良信、岩本晃、上田三郎、太田二郎、大槻きよし、小川哲男、小幡俊二、鍛冶貫一、勝山ひろし、花野原芳明、川上四郎、河目悧二、川本哲夫、北田卓史、草野有矩、国安広治、久保雅勇、くまがわまさお、倉金章介(良行)、黒崎義介、河野きみ、古賀垂十夫、小坂茂、小林和郎、小松崎茂、

駒宮緑郎、斎藤五百枝、斎藤くにお、斎藤長三、さかみひさこ、沢井一三郎、沢田重隆、清水良雄、鈴木悦郎、鈴木御水、鈴木寿雄、鈴木登良次、鈴木未央子、瀬尾太郎、多賀正、高井貞二、武井武雄、武田将美、辰巳まさ江、田中良、中島秋峯、那須良輔、西島武郎、野沢一夫、長谷川町子、長谷川露二、初山滋、馬場のほる、浜崎左髪子、林義雄、原やすお、平井房人、福井英一、福井芳郎、福井福助、伏石繁男、古沢日出夫、堀文子、前谷惟光、松田文雄、松野一夫、松本かつぢ、三木ますお、水野二郎、耳野卯三郎、三芳悌吉、向井潤吉、村上松次郎、安泰、梁川剛一、山川惣治、山中冬児、山根青鬼、山根赤鬼、夢野凡天、横井福次郎、吉岡一、吉崎正巳、吉沢廉三郎、他。

執筆者は、一般作家・詩人・評論家二九七名、児童文学作家一三名、挿絵画家一七六名、漫画家五十七名、研究者一六〇名、総計八二三名にのぼる。これだけの執筆陣を網羅した児童雑誌は、戦前戦後を通して見当らない。「ぎんのすず」は、作家・作品研究上で重要な初出資料だったり、全集漏れ資料だったりするものも多い。「ぎんのすず」をはじめ「広島図書」資料の出現は、児童文学史上のみならず、戦後史料としても貴重である。

五 「ぎんのすず」と広島作家、画家たち

「ぎんのすず」が雑誌形態で発行されはじめた初期のころの執筆者は主に、広島に在住していた作家や画家や教師と、戦争末期、東京から広島に疎開していた作家や画家によって支えられていた。主な執筆者は、寒川光太郎、畑耕一、細田民樹、火野葦平、吉田文五などの作家をはじめ織田幹雄、加藤武三、藤原与一、稲富栄次郎、の研究者、大木惇夫、葛原しげる、山本康夫、山隅衛などの詩人、氏原大作、宮原無花樹、佐伯千秋などの児童文学者たちである。「青空」一九四九年版には大田洋子も連載少女小説を寄稿している。他に、欠落していて現物の証拠はないが、峠三吉は一九四七年の日記の中に「ぎんのすず」に原稿を一月に持ち込み、七月に高額の原稿料を手にしたことを書いている。<sup>(23)</sup>掲載された峠の童話「百足競走」は「峠三吉作品集」下に収録されている。

戦後、広島画家として名声を博した浜崎左髪子や福井芳郎、吉岡一の絵も載っており初期の「ぎんのすず」の表紙画を描いた中島秋峯、岩本晃とともに顕彰しておきたい。

(一) 大田洋子と「青空」

大田洋子（一九〇三～一九六三）小説家、本名初子。

一九〇三年（明治三十六年）十一月二十日、山県郡原村（現豊平

町）に生まれる。七歳の時、両親が離婚したので、山県郡都谷村（現豊平町）に母と住んだが、母の再婚先の佐伯郡玖島村（現佐伯町）に九歳の時に引き取られる。十八歳で広島市進徳女学校研究科を卒業。江田島切串で教鞭をとったあと二十二歳で結婚するが離別。その後上京して菊地寛の秘書となり、「女人芸術」を中心に執筆活動を始める。懸賞募集で「海女」が第一席入選。「桜の國」が朝日新聞社懸賞小説で一席入選し、作家としての地位を固める。

一九四四年（昭和十九年）、広島市白鳥九軒町の妹宅に母とともに疎開して被爆。「屍の街」を脱稿。占領軍検閲により出版は見送られるが、一部削除して中央公論社より出版、注目をあびる。原爆をテーマにした作品「人間檻樓」「半人間」「夕風の街と人と」を発表する。広島図書発行の女学雑誌「青空」やヒマワリ社の雑誌「ひまわり」に少女小説も書く。一九六三年十二月十日、福島県猪苗代町の旅先の宿で心臓発作で急死した。<sup>(24)</sup>

大田洋子は戦前から一般小説と平行して少女小説も書いていた。雑誌「むらさき」一九四〇年六月号には、短編「桃子と真砂」が掲載されている。戦後も雑誌「ひまわり」には精力的に少女小説を掲載し「ホテル白孔雀」は関川護挿絵でポプラ社から出版された。その他、長編小説「黄なるくちなし」（落谷虹児画一九五〇年一月号から十一回連載）、短編「花とハンカチーフ」「海にゆく娘」も書いたが、単行本化されているか否かは未確認。いずれも「大田洋子集」

には載っていない。

「青空」に載った「春の泉」(林唯一画)は、一九四八年五月号(飛翔号)が第一回連載で二回(七月号)、三回(十一・十二合併号)、四回(欠本)、五回(一九四九年三月号)までは確認できたが次号につづく同年四月号が欠本のため完結編は確認できない。しかしこの作品は、「春の訪れ」と改題されて、「風の中の花」(初出不明)とともに単行本化され「春の訪れ」として出版されたが、「大田洋子集」<sup>(26)</sup>には載っていない。

これまで原爆文学作家としての大田洋子はよく論じられてきたが、少女小説作家としてはほとんど触れられてこなかった。小説「流離の岸」や「囚人のごとく」、「屍の街」には子ども的心情や表情が活写されている。両親との離別など、苦難の子ども時代を歩んだ大田にとって、心情が重なる少女小説の検証は、大田洋子の全体像に迫るよいヒントになる。

(二) 畑耕一と「ぎんのすず」

畑耕一(一八九六―一九五七)小説家、評論家、劇作家。

一八九六年(明治二十九年)五月十日、広島市堀川町(現中区)の漆屋、うる平に生まれる。八高を中退して一高を経て東京帝国大学英文科卒。東京日日新聞社の記者を務める傍ら、一九一三年(大正二年)「三田文学」に処女作「怪談」を発表。以後同誌に「おほ

ろ」「道頓堀」など浪漫的・耽美的な作品を発表し続けた。一九三三年、松竹キネマに移り、映画や演劇の脚本や戯曲や大衆小説など幅広く執筆した。一九四四年(昭和十九年)、安佐郡可部町(現広島市安佐北区)に疎開。戦後は、高校の教師をする傍ら、広島県内の校歌などを作詞したり、新聞、雑誌等に小説や随筆、評論を発表するなど、広島地方文化運動に寄与した。一九五七年(昭和三十二年)十月六日、この地で没した。<sup>(27)</sup>

「ぎんのすず」には、初期から作品を執筆、広島図書末期まで関わり続け、「ぎんのすず」に三十九編、「理科と社会科」「青空」などに長編も含めて十編の作品を残した。掲載誌は以下の通りである。

一九四七年(昭和二十二年)

伝記「前島密」中島秋峯画「ぎんのすず」三・四年十一月号、伝記「ゴーサム」岩本晃画「銀の鈴」五・六年十一月号、短編「級長」岩本晃画「ぎんのすず」三・四年十二月号

一九四八年(昭和二十三年)

児童劇「まほうのもり」一―三、中島秋峯画「ギンノスズ」一・二年一月号―三月号、伝記「三浦按針」中島秋峯画「ぎんのすず」三・四年一月号、児童劇「カバのばか」「ぎんのすず」三・四年三月号、「映画はどう見ればよいか」「銀の鈴」五・六年三月号、伝記「小村寿太郎」中島秋峯画「ぎんのすず」三年四月号、伝記「聖画物語 芦雪と応挙」「銀の鈴」六年四月号、名作「マクベス」沢井一三郎画

「銀の鈴」五年五月号、名作「レ・ミゼラブル」沢井一三郎画「銀の鈴」六年五月号、名作「たかのりょうり」沢井一三郎画、「ぎんのすず」三年九月号、伝記「宮本武蔵」沢井一三郎画「銀の鈴」五年九月号、伝記「ティエール」沢井一三郎画「銀の鈴」六年九月号、名作「パンになったあくま」吉沢廉三郎画「ぎんのすず」三年十月号、伝記「ある日の大石良雄」「銀の鈴」五年十月号、伝記「北条泰時」吉沢廉三郎画「銀の鈴」六年十一月号、名作「かた目のみやこ」鈴木寿雄画「銀の鈴」四年十一月号、名作「こまったこぶた」松本かつぢ画「ぎんのすず」三年十二月号、名作「だまらず王女」鈴木寿雄画「銀の鈴」四年十二月号

一九四九年（昭和二十四年）

名作「のこりのねがい」スペイン童話、吉沢廉三郎画「ぎんのすず」三年一月号、名作「ちかめのりょうし」黒崎義介画「ぎんのすず」三年二月号、名作「ホワイト・ファンク」ジャック・ロンドン原作、村上松次郎画「銀の鈴」四年四月号、創作「桜さくところ」村上松次郎画「銀の鈴」五年四月号、伝記「わかきシヤカ」沢井一三郎画「銀の鈴」六年四月号、理科「磁力閉静」「新科学」四月号、名作「いつまでいってもいいきれない話」鈴木寿雄画「銀の鈴」四年五月号、名画「むぎばたけ」コンステイブル画「銀の鈴」六年五月号、絵物語「うそりうんすけ」鈴木寿雄画「ぎんのすず」三年六月号、名作絵話「雲をはく石」「聊斎志異」より三芳悌吉画「銀

の鈴」五年九月号、名作「血の信号旗」ガルシン原作吉沢廉三郎画「銀の鈴」四年九月号、名作「子山羊のツリップシー」モートン原作林義雄画「銀の鈴」四年十月号、名作「あらし」三芳悌吉画「銀の鈴」五年十月号、名作絵話「トム船長修業」清水良雄画「銀の鈴」四年十一月号、名作「淋しい小屋」沢井一三郎画「理科と社会科」一年四月号随筆「川と橋」「理科と社会科」二年四月号、「日本の歳時記夏」「理科と社会科」一年五月号、「シラノ・ド・ベルジュラック」村上松次郎画「青空」六月号、長編小説「わんぱく王国」1-7、斎藤長三画「理科と社会科」六月号、十二月号、「日本歳時記秋」「理科と社会科」一年九月号、小説「マアちゃんの役割」松野一夫画「青空」十月号、「秋祭り」「理科と社会科」一年十月号、「日本歳時記冬」「理科と社会科」一年十二月号

一九五〇年（昭和二十五年）

アメリカ童話「フットボールのお金」沢田重隆画「銀の鈴」四年三月号

一九五二年（昭和二十六年）

国語「雪に叫ぶもの」村上松次郎画「銀の鈴」四年十二月号

一九五二年（昭和二十七年）

国語「ホジャー物語」トルコの話、駒宮緑郎画「ぎんのすず」六年六月号、名作「かた目のみやこ」さかみひさこ画「銀の鈴」四年十一月号

一九五三年（昭和二十八年）

名作「マクベス」小谷野半二画「銀の鈴」五年二月号

「ぎんのすず」に載った畑耕一の作品は、十編余りの創作と随筆の他は伝記と名作のリライトである。創作の短編「級長」は、地方に疎開してきた少年が、初めは地方の文化の遅れを馬鹿にしているが、やがて地方の豊かき、よさに目覚めていく。作者の心情が重なって見える作品である。伝記と名作は、「ぎんのすず」の編集上の重要な柱であった。<sup>(28)</sup>敗戦を境に帝国主義から民主主義へと大きく思想の転換を迫られた日本人が、未来の指針となる偉人としてだれを選んだかは戦後思想を知る上で興味深い。名作のリライトは、名作に触れる手がかりになるとはいえ、数百頁の作品を数頁に纏めて文学の真価を伝えられるとは到底考えられない。作家に創作よりも、名作のリライトばかりを書かせて掲載したことが、やがて「ぎんのすず」の質が問われ、児童文学史上から消えていく要因になった。

## 六 「ぎんのすず」の豊かさと価値

「ぎんのすず」は学年別月刊誌だったことから、文芸誌とは見なされず、資料も散逸してしまったことも相まって、ほとんど顧みられないままに二十世紀が終わった。しかし、改めて資料を読むと、混

乱期にあった日本の終戦直後の子供の文化や大人の模索が手にとるように伝わってくる。占領下にあってもなお、子供たちにあらゆる文化の豊かさを手渡そうとした大人たちの熱意も汲み取られ、この雑誌に足跡を遺した人々とその業績を検証することは、現代に繋がる戦後史ともなっていく。膨大な人々によって支えられた「ぎんのすず」は、戦後日本の文化、教育、平和、復興、研究の大きな手がかりを与えてくれる。

注

- (1) 広島市役所「新修広島市史」第四卷文化風俗史編、六八〇頁
- (2) 前掲書、六八一頁
- (3) 広島児童文化振興会「銀の鈴」タブロイド判創刊号、二面下段
- (4) 中国新聞「三人による戦後史広島文芸の日々」一九七八年二月六日付
- (5) ひろしま国語教育太河の会編「広島市小学校国語教育の歩み」戦後編、溪水社、二〇〇〇年八月。一二六頁
- (6) 松井富一「国際的出版都市建設の夢」広島図書、一九四九年六月、二十頁
- (7) 広島市役所編前掲書、六八二頁
- (8) 松井富一前掲書、四十五頁
- (9) 松井富一前掲書、四十六頁
- (10) 松井富一前掲書、二十三頁
- (11) 森本和子「占領下の翻訳絵本と教育―広島図書」私家版、一九九八年十月、八一頁
- (12) 森本和子前掲書、二十九頁、三十一頁

- (13) 渡辺晋「松井富一と広島図書の周辺」『すずのひびき』創刊号、ぎんのすず研究会、二〇〇二年三月、五頁
  - (14) 松井富一前掲書、五頁
  - (15) 長瀬昭之助「吉田初三郎ニュース」二号、吉田初三郎研究会二〇〇一年六月、英語版「HIROSHIMA」広島図書、一九四九年（六月？）
  - (16) 松井富一前掲書、二十五頁
  - (17) 朝日新聞、一九四六年十一月八日、同年十一月二十九日、同年十二月十六日、一九四七年二月十五日付 長瀬昭之助提供
  - (18) 渡辺晋前掲書、六頁
  - (19) 渡辺晋前掲書、七頁
  - (20) 一九五一年「ぎんのすず」初級A四月号他、各学年四月号「アメリカだより」
  - (21) 中国新聞「ぎんのすずの遺産」第二部4、二〇〇〇年二月十二日付
  - (22) 渡辺晋前掲書、八頁
  - (23) 峠三吉「峠三吉作品集」下、青木書店、一九七五年 一九三頁、二一二頁
  - (24) 日本近代文学館「日本近代文学大事典」三卷、講談社、六十九頁
  - (25) 東光出版社、一九四九年六月刊 広島市立中央図書館所蔵
  - (26) 三一書房、全四巻、一九八二年十月刊
  - (27) 「広島県人物人情報リスト」二〇〇〇、日外アソシエーツ、七六六頁、梶山季之文学碑管理委員会「梶葉」Ⅱ、一九九三年 岩崎清一郎「広島の文学」一六二頁
  - (28) 長尾正憲「銀の鈴は子供たちに何を教えようとするか」広島図書一九五〇年四月、四頁〜五頁
- （みうら・せいこ ぎんのすず研究会会員）